

【研究紹介】 学校体育におけるソフトボールについて —楽しいソフトボール授業の指導事例—

研究調査部 岩間 英明（松本大学） 二瓶 雄樹（中京大学）

I. 体育授業におけるソフトボールの現状

学習指導要領の改訂により、中学校の球技は種目の特性により「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の3つに分類される。さらに中学校1～2年生のうちに、全ての型のスポーツ種目を経験させなければならないこととなった。それぞれの型で採り上げられたスポーツ種目は、ゴール型はバスケットボール・サッカー・ハンドボール、ネット型はバレーボール・テニス・バドミントン・卓球などで、それぞれ複数種目が示されているが、ベースボール型だけはソフトボール1種目だけが採り上げられている。

これはソフトボールが全国の中学校で必修化されたことを意味し、全国民が学校体育で必ずソフトボールを経験するということである。すなわち、ソフトボール界からみれば、ソフトボールの普及・発展という意味で大変な好機が到来したことになる。

そのため、日本ソフトボール協会ではいち早く「学校体育ソフトボール」を提示し、生徒が安全で楽しくソフトボールに親しめるように、体育授業に合ったルールや用具の開発を行った。また、それだけではなく、地方協会が主体となって、実業団や大学の指導者などを学校や教員の研修会等に派遣したり、講習会を開催したりして、ソフトボールを学校体育に取り入れるための支援を積極的に行ってきた。その結果、これまでに比べ、生徒が体育授業でソフトボールに興じる姿が数多く散見されるようになった。

しかし、その一方で、実際に学校現場で授業をしている教員の一部からは「学校体育ソフトボール」はおろか「ソフトボール」そのものについても、体育授業の教材としての適性について否定的な意見も耳にする。2012年度に実施した動向調査(n=47)では、

◇他のスポーツ種目比べて個人差が大きい

◇技能レベル、ルール理解が低い上、習得に時間がかかる

◇運動量の確保ができない

◇用具を揃えるのが予算的に難しい

◇安全に配慮したグラウンドの広さを確保できない
などの意見があげられた。

そのため、ソフトボールを教材として採り上げはするものの、単元展開ではゲームをせずに練習だけに留めたり、ハンドベースボールやキックベースなどソフトボールとは違うベースボール型の種目に変更したりしている。さらには今回の調査対象となった学校の中で、ベースボール型の種目そのものを授業で実施していないという学校も4校(8.5%)あったというのが現実の姿である。

II. 「学校体育ソフトボール」の普及状況

一方、日本ソフトボール協会が体育授業を念頭に示した「学校体育ソフトボール」も、期待されたほど普及が進んでいないというのが実情である。

「学校体育ソフトボールを知っている」という教員は21校(44.7%)で全体の半数にも満たない。さらに、実際に「学校体育ソフトボール」のルールを利用して授業をしているのは、これを認知している教員のうちの9校(42.9%)で、全体から見ればわずか19.1%と、8割の学校では「学校体育ソフトボール」は実施されていない。

このように、ソフトボールを体育で授業展開するために考案された「学校体育ソフトボール」が、学校現場で浸透していかない理由は、

◇用具を一式揃えるための予算が確保できない。

◇オフィシャルルールに近過ぎて、生徒の実態に合った学習にならない。

といった点が挙げられており、「予算」と「学習内容」といった2つの点で、日本協会の構想と学校現場との乖離があったとも言える。

Ⅲ. 学校体育におけるソフトボールの普及戦略

「予算」については、今回の改訂でソフトボールが必修化された中学校の多くは、自治体が設置した公立学校であり、ソフトボールを実施するための体育予算が、特別に準備されている所はほとんどない。そのため、ボールやバットといった既存のソフトボール用品を、学校体育ソフトボール用の新しい規格のものに変更するのは、協会サイドが考えるよりも実際にはかなり大変なことである。

そのため、安全を配慮して開発した用具のコンセプトは、適切で非常に理想的であり、指導にあたる教員もその必要性は十分感じているものの、購入する学校は少ないという現実が生じている。そうした背景を踏まえ、ソフトボールの発展を長期的に捉えるのであれば、協会が各学校へ用具の無償配布なども考慮していくべきであろう。

しかし、そこには財源という大きな問題もある。そこで『ベースボール型スポーツの普及発展に寄与』という視座に立ち、日本野球連盟やNPB（日本野球機構）との連携を図ることを提案したい。若年層でのソフトボールの普及や女子のベースボール型スポーツへの関与は、プロを含めた野球ファンの長期獲得および層の拡大にもつながると考えられることから、将来的にも高野連、社会人野球、プロ野球球団やNPBから協力を得られる可能性は十分にあると思われる。

実際、NFL（National Football League 全米プロアメリカンフットボールリーグ）は、すでに日本での活動の主体となるNFL JAPANを設立し、同様の内容を戦略的に実施している。その中でNFLはアメリカンフットボールの簡易版として“フラッグフットボール”を導入段階として位置づけ、様々な試みを実施して学習指導要領への導入を目指している。その戦略は

アメリカンフットボールはルールがわかり難い



フットボールの基本構造を理解することが大事



基本構造がわかれば、フットボールの見方がわかる



アメフトファン予備軍、プレイヤー予備軍となる



NFLファン予備軍となる

というものである。さらにその環境づくりとして、全日本フラッグフットボール協会が毎年全国13～14会場で指導者講習会を開催し、約400校の教師に指導方法を指導している。そして、受講後、フラッグの取り入れを希望する学校へ用具の無償提供をする。莫大な負担ではあると思われるが、結局それが全国各地の小中学校の体育などでフラッグが行われることになり、フラッグを通してフットボールの基本構造を知る子ども達を増やすことにつながるというのである。

ソフトボールがNFLという世界規模のスポーツ団体と同じことはできないかもしれない。しかし、将来的にはNPBを含めた野球界を巻き込んで、ベースボール型スポーツの発展に寄与できるような形を模索していかなければならない。そして何よりも、ソフトボールはすでに学習指導要領に示されているスポーツであるということだけに安閑とせず、より一層学校現場の実態を踏まえた新しい指導方法を常に提示し続けていくべきであろう。また、そのような取り組みをしていくことは、文部科学省が示した「スポーツ立国戦略」の中の

○ライフステージに応じたスポーツ機会の創造

○世界で競い合うトップアスリートの育成・強化

とも完全に合致するものである。

Ⅳ. これからの学校体育におけるソフトボール

現在“ソフトボールは学習指導要領に示されているから実施されているだけで、教員からは必ずしも歓迎されている種目ではない”という現実を私たちは直視すべきである。こうした状況が続けば次回、あるいは次々回の指導要領の改訂で、ソフトボールは再び選択、または実施種目から除外される可能性がある。体育授業というある種特殊な状況でのスポ

ーツ活動であることを踏まえ、それに相応しい「体育学習ソフトボール」を提示することが必要である。そのためは、教育研究機関としての大学が組織する全日本大学ソフトボール連盟の責務は重大である。

そこで、今後、数回に分けて子どもたちが、楽しく学習できるソフトボールの展開例を、学生のアイデアも採り入れながら提示していくこととする。

【練習方法例】

《1》シュルシュルゲーム

[低い姿勢でゴロを捕球するための基礎的な練習]

地面にボールを置き、ゴールまでずっとボールを転がしていく。最初は直線を転がして進み、慣れてきたらいろいろとコースを変えてみたり、障害物を置いてみたりして、練習に変化を持たせるようにする。



片手や両手で転がしたり、素手やグ

ローブを付けて転がしたりすることで、捕球姿勢の習得や多様な動きづくりにつなげることができる。

また、ある程度慣れてきたら、個人やチームで競争するとおもしろいであろう。その時、速さだけでなく捕球の姿勢なども得点化すると楽しみながら、正しい技術の習得にも結びつけられる。

(富士大学 大山颯希)

《2》バンドゲーム

[ボール打つための初歩的な段階での練習]

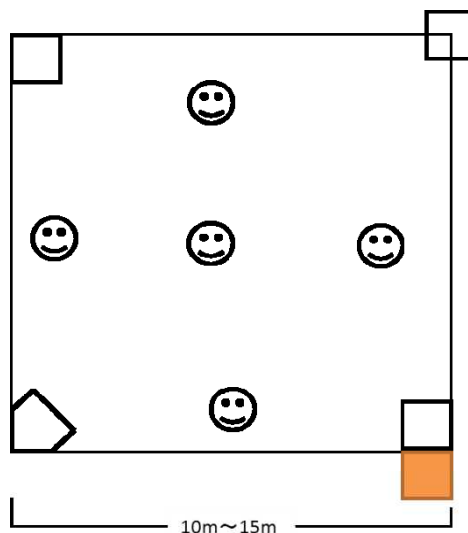
ソフトボール経験のあまりない子どもにとって「動いているボール」を「バット」で「打つ」というのはかなり難しい技術であり、習得までに時間がかかる。そこで、初歩的な段階の練習として、投げられたボールをバットに当てるだけの練習を行う。その際、子どもたちの興味関心を引くために右図のようなゲーム形式を採り入れてみる。

〈ルール〉

①塁間の距離はオフィシャルルールよりも短くする。走力、守備力、バットコントロール能力、打球コントロール能力などを考慮して距離を決める。およそ10～15m程度が目安となる。

②打者はバントのみ可とする。バントには様々な種類があるが、安全面を考え基本的にプッシュ系のバントは行わないものとする。

③1チーム5人とし、5イニング制のゲームを実施する。



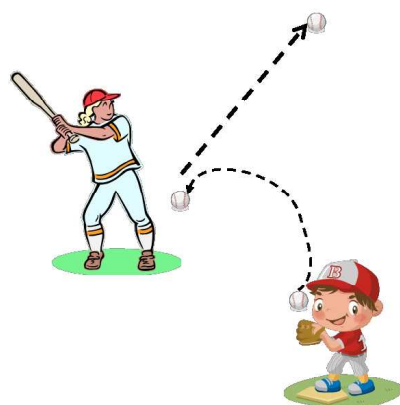
(富士大学 中田 楓)

《3》早打ちゲーム

[バットにボールに当てるといふバッティングの基本の練習]

バッティングはボールにバットを当てる力であり、バットを思ったところに動かす、いわゆるバットコントロールやバットとボールが当たるタイミングをとる力が大切である。そのため、特にバットを振るといふ運動経験が少ない子どもたちには、「バットを振る」「ボールに当てる」といふ運動を数多く体験させる必要がある。

そこで、2人1組になってできるだけたくさんの紙を丸めたボールを打つ練習を行う。この練習ではバットを振る、バットをボールに当てるといふバッティングの経験値を増やすことに主眼を置くものであるが、制限時間内に何回ボールを打てたかなどのゲーム化することも可能である。また、ボールを紙ボールからスポンジボール、ソフトボールへ変更したり、トスをあげる距離を拡げたりすることで、バッティングの習熟度を高めていくことができる。なお、安全上トスする者の前に、防球ネットを置くことが望ましい。



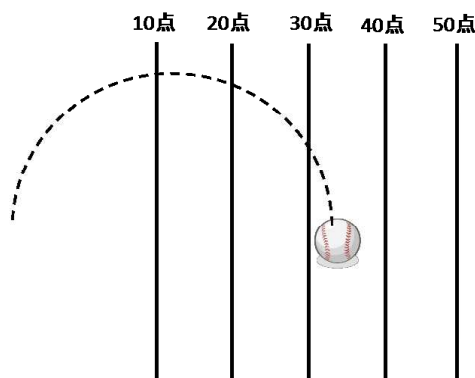
(富士大学 榎林茉実)

《5》バッティングゲーム

[バッティングのおもしろさを体感するとともに、打撃力を向上させるための練習]

バッティングは、ボールをバットの芯で捉え、遠くに飛ばすことができれば、楽しさやおもしろさを感じることができる。

しかし、反対にボールとバットが当たらなかったり、ボテボテの打球しか打てなかったとしたらバッティングの楽しさは味わえず、興味を失いかねない両刃の剣のようなところがある。そのため、バッティングの練習は楽しさと同時に、打撃技術の向上を目指す必要がある。



そこで、図のようにグラウンドに等間隔で直線を引き、打球がバウンドした所で得点を競い合い、ゲーム感覚でバッティング練習をしながら、打撃力の向上を図る。

チーム対抗戦として味方にトスしてもらったボールを打つが、単に遠くに飛ばすということだけでなく、地域を○で囲んで得点を変えたり、打球方向によって得点を変えたりすることで、バットコントロールや打球コントロールを身につける練習にも応用でき、バリエーションは豊富である。

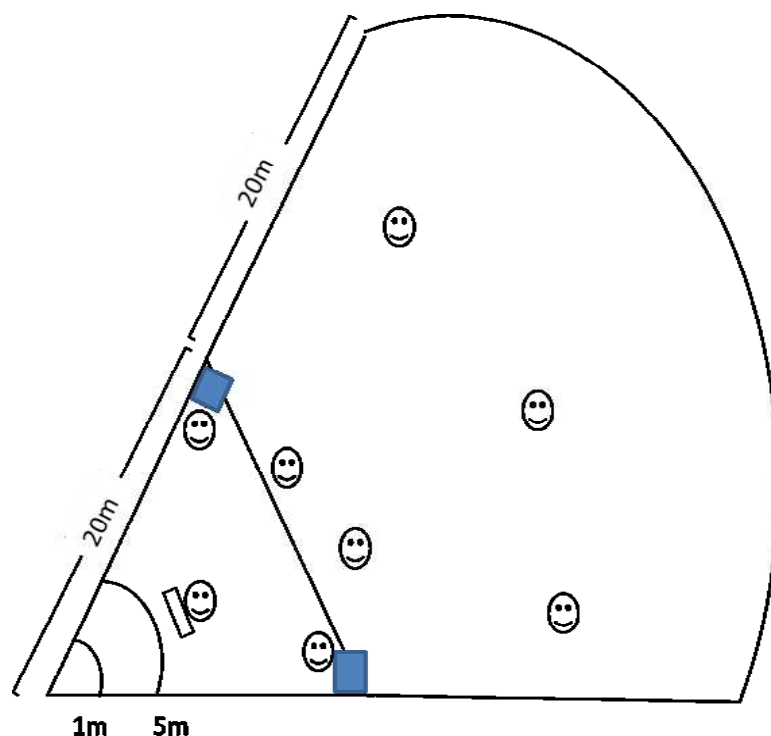
(富士大学 内田千尋)

【提案ゲームⅠ】

提案ゲームⅠの授業は、用具や場を子どもの実態に合わせて設定し、ソフトボールの特性に触れさせようとするものである。

〈コート及び用具の例〉

- ①正三角形のコート、塁間は20m、ホームからネットまでは40mに設定する。（コートを小さくすることで、グラウンドの小さい学校でも最低2面はコートが作られる。）
- ②安全上及び試合内容的な配慮から、ホームから5mと1mにラインを引く。



- ③用具は安全やボールに対する恐怖心を生まないようにするため、最初は あたっても痛くないプラスチック製のバットとゴムボールを使用する。
- ④グローブは初めから着けて感覚を覚えさせる。
- ⑤慣れてきたところで徐々に通常のバットやソフトボールを使用する。

〈ルール例〉

- ①打撃は5mラインを、バントは1mラインをノーバウンドで越えなければならない。
- ②守備は8人制で、投手・一塁・三塁には必ず一人ずつ、一塁と三塁の間に2人、外野は3人とし、一塁と三塁の間の2人はどこを守ってもよいことにする。安全面を考え捕手は壁かネットを置くなどして補う。
- ③投手は下手投げとし、ワンバウンドかノーバウンドで相手のバッターに合わせて変えても構わない。
- ④打者はストライク・ボールなどのカウントはとらず、打撃が完了するまで打つことができる。
- ⑤3アウト制は採用するが、打順が一巡したら攻守交替とする。
- ⑥外野の後ろに落ちたら2ベースヒット、外野と内野の間に落ちたら1ベースヒットとする。

〈授業の進め方〉

3時間の単元構成とした場合、3時間目までは基礎練習、あとの5時間でいろいろなチームをつくり試合をする。1クラス40名程度として、8人制で5チーム編成をするため、4チームが試合、残りの1チームが練習をする。

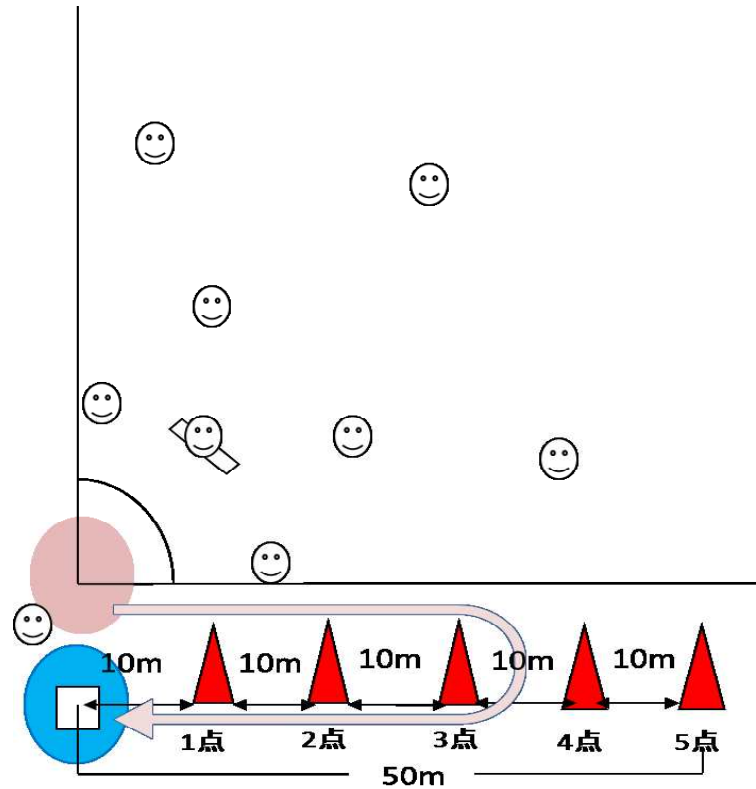
(龍谷大学 梅本貴美)

【提案ゲームⅡ】

提案ゲームⅡの授業は、ソフトボールの技術構造の中で「打者」VS「守備」の場面特性に着目したものである。

投手が投じたボールを打者が打つという通常の形での攻防を行う。ベース（三角コーン）は直線に並べて、そこをUターンして戻り、距離に応じて得点できることとする。

攻撃側は打球および守備側の状況に応じた走塁判断をして、ホーム（走者用の円）に戻ってくる。それに対し、守備側は打球を処理し、いち早くホーム（守備用の円）にボールを返球し、フォースプレーとして判断する。



具体的なルールは以下の通りであるが、子どもの実態に応じて、用具や距離、守備人数などの変更も可能とする。

〈ルール例〉

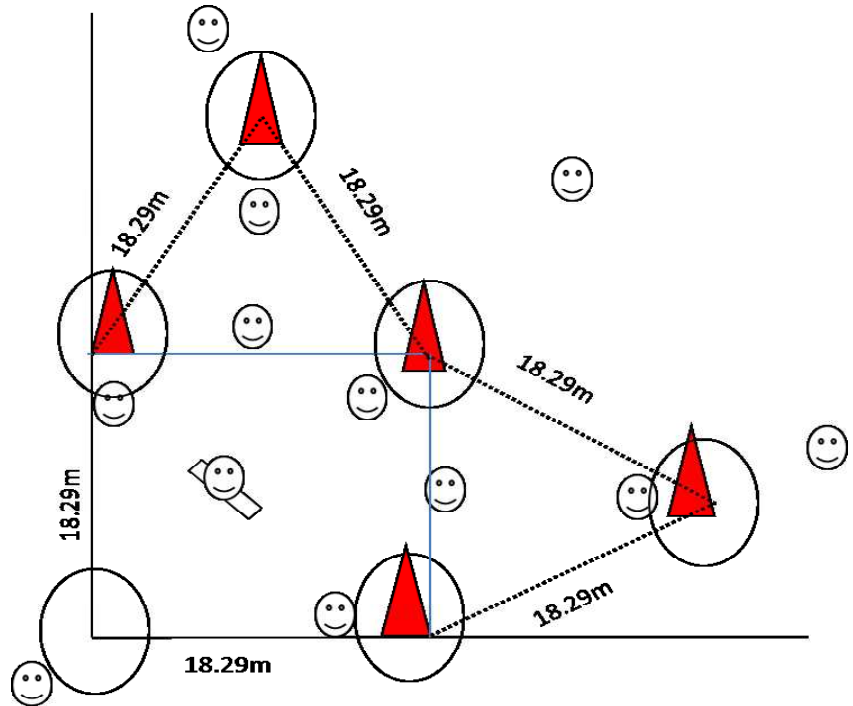
- ①用具はテニスボール、ソフトバレーボール、ティーボール、ソフトボールなどや、テニスラケット、ティーボール用バット、ソフトボール用バットなど、技能や習得状況に応じて使い分ける。
- ②打者は相手チームの投手が投げたボールを打つ。ただし、ホームベースより半径9m以上はボールを転がさなければならないため、バントなどの打法は使ってはいけない。
- ③打者は打ったら打球や自分の足の速さを考えながら、打者走者となりコーンを選択して走る。
- ④ボールがホームに戻ってくるまでに、選んだコーンにタッチをしてホームを踏んだら、進んだコーンの得点が入る。走った距離が長い程得点が大きい。
- ⑤野手は打球を処理したら、ホームに投げる。打者がホーム還ってくるまでに、紫で示した（上の）サークル内（半径3m）でボールをキャッチすればアウトとなる。
- ⑥危険防止を考え、ホームへ還ってくるランナーと交錯しないように、サークルは攻撃側、守備側に分けて設置し、フォースプレーで判断する。
- ⑦打者が一巡したら攻守交替とする。

（松本大学 沖津千佳）

【提案ゲームⅢ】

提案ゲームⅢの授業は、ソフトボールの技術構造の中で「走者」VS「守備」の場面特性に着目したもので、走者の進塁をめぐる行われる攻防を楽しむ内容である。

ソフトボールの攻防は走者の有無によりその特性が大きく変わる。すなわち、走者がいない時、打者は自分が塁に出ることを考えて打撃を行うため、守備側とりわけ投手との対戦（打者VS投手）が運動課題の中心となる。しかし、



走者がいる場合、打者は自分がアウトになっても走者を進める（走者VS守備）という運動課題に変質する。このような特性の違いを踏まえ、「進塁」を学習の中心に据えたゲームである。

打撃は通常通り、投手が投げたボールを打つこととするが、塁は五塁ベースまでであることから、本塁に到達するまでにアウトになってしまう機会が多くなり、得点に結びつけることが難しくなる。そのため、攻撃側は走者を進塁させるための打撃を考えることが必要となる。一方で守備側は走者の進塁を阻止したり、遅延させたりするための機会が多いので、守備の選択肢が多くなる。

〈ルール例〉

- ①用具はテニスボール、ソフトバレーボール、ティーボール、ソフトボールなどや、テニスラケット、ティーボール用バット、ソフトボール用バットなど、技能や習得状況に応じて使い分ける。
- ②塁間はオフィシャルルール同様18.29mとするが、一・二塁間、二・三塁間のベースは正三角形上の頂点に置く。
- ③各塁上での安全配慮を考え、それぞれの塁にはベースの代わりに三角コーンを置いた上で半径2mの円をベースとする。
- ④クロスプレーによる事故を防止するため、スライディングは禁止し、通常の一塁ベースと同じようにすべての塁においても走り抜けルールを適用してフォースプレーによりアウト・セーフの判定を行うものとする。
- ⑤5アウトまたは打者が一巡したら攻守交替とする。
- ⑥守備は12名を基本とするが、必要に応じて増減してもよい。

(松本大学 田島梨恵)

※実践例は各大学から寄せられたものを岩間が一部再構成して掲載した。